HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	廣瀬可恒監修，『日本酪農の歩み』，酪農学園大学エクステンションセンター，1998年，326頁
Author(s)	菅沼，弘生
Citation	北海道農業経済研究，7(2)，86-88
Issue Date	1998-09-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/63175
Type	journal article
File Information	KJ00009065011.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

が用意されており、農業者としての自立と経営の継承にどのようにリンクしているのかは重要な問題である。

最後に、本書は担い手問題に関して有益な方策をいくつか述べた後で、農政の展開を期待して結んでいるが、これには納得がいかなかった。農業の将来像を示し、必要な施策を講ずるのは重要である。それは本書でもきちんと論じられており異論はない。だが、米価低迷に悩んだ農業者の嘆き、心の揺らぎでこの書を結んで欲しくはなかった。ネガティブな現実を見よということであろうが、いつまでも現況の中に「動かされるもの」として揺れている担い手であってよいのであろうか。厳しい中でも農業の存在価値を社会に知らしめ、農業の将来ビジョンを自分たちで創っていくような頼もしい主体が形成されることが重要である。フランスやドイツの誇り高き農業者たちも同様な状況下で同様なセリフを吐くのであろうか。そう考えると、このことは色々な意味で「自立」「主体」という大きな問題につながって行くことに気づかされた。もしかしてこれも巧みな編集の糸（意図）であろうか。

廣瀬可恒監修
『日本酪農の歩み』

酪農学園大学エクステンションセンター
1998年　326頁

北海道大学大学院　**菅沼　弘生**

I

本書は32名の研究者、関係団体職員、教育者によって執筆され、社会科学・自然科学の両分野から日本酪農の歩みを立体的に明らかにしたものである。

わが国の酪農は「若者にとって魅力ある産業ではな」くなり、大きな転換期を迎えようとしている。さらに現在の日本酪農は食糧の国際化、ＷＴＯ体制、環境問題など大きな問題に直面しているが、…先人の「哲学」と「夢」に学び、困難を克服してきた「勇気」と「実行力」に敬意を払うことにより、新たな精神的バックボーンとエネルギーを獲得することこそ「若者に魅力ある酪農」の再構築につながるものと確信する（「監修の言葉」）。

以上のような問題意識のもと、目次構成は以下のようである。全体は６部からなり、第１部と第２部は全体動向と地域動向についての酪農の歴史であり、第３部から第５部は「酪農技術の推移」、「経営・環境および諸制度」、「農村社会と酪農生活」であり、技術、経営、教育といったテーマ別の整理である。第６部は資料編である。

II

第１部は「酪農史概説」であり、２つの章から構成され、戦前から戦後の酪農の歩みを概説している。第１部は、牛乳・乳製品の飲食の歴史から始まり、食文化にたいする意識調査（平成９年度）結果の評価で終わる。需要面の動向を注意深く取り上げている点が興味深い。「明治・大正の畜産はもっぱら家畜増殖奨励偏重であったが、大正末頃から畜産経営・経済の面に眼が向けられ始め、昭和元年（1926）頃から畜産物の流通施策が重視された。…注目すべきは『農村牛乳』の推進が流通施策の目玉として進められた」とあり、この過程で生乳生産は都市から農村へと拡大している（第１章「前史および戦前の酪農」）。戦後においては経済発展に伴って食生活の「洋風化」が全国規模で一層進展し、「有畜農家創設特別措置法」（昭和28年）、「酪農振興法」（昭和29年）、「不足払

い法」（昭和40年）等によって生産は増加傾向をたどり適地適産と専業化をもたらした（第２章「戦後50年の酪農」）。

第２部は「地域酪農の歩み」であり、戦後酪農の展開と課題を農区別に整理している。ここでは全体を通して酪農形態別にその展開と課題を整理してみよう。酪農形態は大きく、都市近郊酪農、複合酪農、単一酪農に分けられる。

都市近郊酪農は明治期に端を発し、粕類・濃厚飼料を主な飼料給源とする市乳生産形態である。これら３形態の中で個体乳量水準は最も高いが、都市の拡大に伴って糞尿の環境問題が顕在化し、最も酪農家の脱落が激しい。課題として畜産団地の形成を含む糞尿処理施設の充実が指摘される。

複合酪農が本格的に拡大するのは、単一酪農と同様に昭和30年代である。しかし、複合酪農は大正15年の畜産物の流通対策、昭和６年公布の「有畜農業奨励規則」を契機に戦前から酪農展開の萌芽がみられ、戦後においても早い段階で拡大するのに対し、単一酪農は、昭和30年代に本格化する基盤整備事業を経て拡大する。前者は水田をベースに水田裏作による飼料作を自給飼料基盤としており、転作田の積極的な飼料作利用が課題である。後者は畑作・未利用地をベースにしており、比較的大面積の飼料作を主体とした土地利用であり、労働力の軽減対策が課題とされている。なお、共通してゆとりの創出、堆肥の還元が課題である。

Ⅲ

第３部は「酪農技術の推移」であり、購入飼料の多給によって多頭化と個体乳量の増加を遂げた経営展開を支え、方向付けてきた技術を８つの局面から整理している。各章はドキュメントとしての迫力と内容を十分に備えている。紙面の都合から各章の紹介は省くが、環境保全についての言及を紹介する。第１章「乳牛の飼養技術」では「いかに技術が進歩しても、…酪農は土、草、牛、消費者を有機的に結ぶことに変わりはない」とし、泌乳能力の向上には輸入濃厚飼料の増給は限界であり、自給粗飼料の品質改善が大きな課題であるとしている。第３章「牛舎および施設設備の変遷」では酪農生産にとって最も基本的な「循環」を基本に、土地条件・気象条件・社会条件に適した自己のシステムを作り上げることが大切であるとしている。第８章「家畜害虫防除の50年」では防除技術の側面から環境保全対応への積極的・具体的な提案を行っている。これまで駆除に偏っていた防除技術を予防に重点をシフトすべきであるとしている。その具体策を羅列的に挙げれば、家畜・畜舎の清潔化、フン虫（例えば食糞性コガネムシ）の導入、網戸・縄のれん等による害虫の進入障害施設の設置、製剤を含む耳標の利用、製剤の家畜への直接滴化等である。

第４部は「経営・環境および諸制度」であり、７つの章から構成されている。第１章では酪農民による乳価値上げ運動の展開を丁寧に整理し、乳価制度と乳価の変遷をリアルに描き出している。第２章では乳業メーカーの歩みとともに、その現状・課題について規模別・農区別プラント数、稼働率の指標から整理している。第３章は酪農経営に対する技術・労働面の支援組織について現状と課題の整理、続く第４章は農業簿記の普及について酪農経営の展開過程に即した整理である。残りの３つの章は環境保全について取り上げている。第５章では循環農業の模索として無畜農家と連携した地域複合形態、長期的には自給飼料による酪農形態を提案している。第６章では環境保全型酪農をふん尿の「過剰」を適切に対処できているものとし、ふん尿処理局面から事例を紹介している。第７章では全国的にも先進的であるデンマークの家畜環境保全対策を紹介している。まず課税システムを所得から資源枯渇、環境負荷に対する課税へと段階的にシフトさせ、畜産農家にはマニュア

ストアの設置、農法の転換（秋播き作目の耕作強制）、家畜単位の遵守を義務づけ、バイオガス・プラント事業によって家畜ふん尿と有機質廃棄物からバイオマス（バイオガス）と有機質肥料（液肥）を生産する。さらに環境保全に向けた畜産農家の投資、バイオガス・プラント事業へは補助がなされており、これらは地域住民をも含む一国全体の環境保全対策である。

第5部は「農村社会と酪農生活」であり、3つの章から構成され、担い手教育に重点が置かれている。第2章では酪農の生活改善における女性教育という視点から野幌高等酪農学校「家庭科」、実践農家の活動、農業改良普及事業、日本農業協同組合婦人部、全国酪農青年婦人会議の活動を紹介している。第3章では酪農の担い手教育を精力的に行ってきた酪農学園の取り組みを全面的に扱っている。それは戦前期における全寮制による少数先鋭の実学教育に始まり、戦後酪農への指向が高まる中で通信教育制の導入、平成10年度「環境システム学部」の発足等が整理されている。

Ⅳ

本書は地域酪農、技術、経営・制度、教育面から日本酪農の歩みを立体的に描き出した共同作業の成果であり、また積極的な問題提起を行っており、高く評価できよう。「先人の築いてきた足跡を見つめ直し、これからの50年を力強く歩むためにも、この企画が練られ」（「あとがき」）、研究者、関係団体職員、教育者が一丸となって取り組んだ、その真摯な態度に敬意を表したい。教育に関する記述が第5部として最後にまとめられており、次世代への思いが込められている。

次に読者側からの本書に対する要望を述べたい。それは上の「これからの50年を力強く歩むため」の具体的内容に関してであり、労働軽減対策、ふん尿処理対策が不可欠であるという本書の問題提起に対する一定の回答についてである。もちろん、本書でも循環農業の理念、労働支援組織の変遷、環境保全型酪農の防除・経営・制度面からの整理がなされており、極めて魅力的な章になっている。それ故に、地域として環境保全型酪農を実践していくに当たっての具体的展望が望まれる。第1には共通のフィールドを土台としたケース・スタディが望まれる。第2にそれを実行に移す上での技術、農家・関係機関の対応策、政策提言が欲しい。第3は教育に関わって酪農学園大学に新設された「環境システム学部」の研究・教育理念の提示である。以上は、本書を総論編とすれば、その各論・実態編となろう。

最後に本書は酪農の入門書として最適であるばかりでなく、技術、経営、制度、歴史がコンパクトに生き生きとまとめられており、専門家にとっても常に手元に置いておきたい1冊である。